

## 第一章 地下通路でエッチをするカップル

今日のバイトはちょっと暇だった。日曜日でも、閑散月だからお客さんが少ないらしい。

時間が余ったので、店長から倉庫の整理整頓を指示される。大学生ではあるけどバイト長になって、社員さんのように信頼されていた。だから、一人でも倉庫の整理を任される事がある。

「はい」

倉庫は店から離れた地下にあり、私は鍵を持って階段を下りていく。この先には地下お客様駐車場があつて、途中の横の扉が倉庫だった。唐突に若い女の子の声が、階段下から聞こえて来た。

「こつちで良いのかな？」

「たぶんこつちで良いだろ」

どうやらカップルのようで、地下駐車場から上がって来たらしい。確かにこのビルは迷路のようになっていて、迷ってしまう人が多かった。階段を曲がって、上にやって来た女の人が私に聞いて来た。

「すみません。お店のフロアはどつちですか？」

「あ。この階段を上がっていくと店舗フロアです」

「ありがとうー」

やっぱり迷っている人だった。楽しそうに話しながら上に上がっていった。

倉庫のドアの前に来たので、鍵を開けて中に入る。中には商品のストックが置いてあり、結構乱雑になってしまっていた。昨日の土曜日は忙しかったと言っていたので、きっと商品の出し入れが頻繁にあったのだろう。

「さーて」

私が整理しようとする、突然ドアがノックされる。

コンコン！

「えっ？」

人のいない地下なのでちょっと怖い。もしかしたら社員さんかな？

そう思いつつ、入り口にいつて扉を開いてみる。すると聞き覚えのある声と顔が現れた。

「お疲れ様です！」

私のテンションが一気に上がってしまう。

「入っていくのが見えたからさ」

「はい！ 倉庫を整理しに来たんです！」

そこに現れたのは、最近ひょんなことからお付き合いをするようになった、メンズアパレルショップの店長だった。

「唯花（ゆいか）が見えたから、ちょっとテンション上がってしまったな」

「ふふ。乙坂（おとさか）さんは、こんなところで何してるんですか？」

すると乙坂さんは、段ボールに入った商品を見せた。

「在庫を取りに来たんだ。うちの倉庫はこの奥だから」

「そうだったんですね。会えてうれしい」

「俺もだ」

そう言つて、乙坂さんはずっと倉庫に入つて来る。パタンと扉が閉まると、段ボールを足元に置いて私に近づいた。

ちゅっ♡

「ん…」

乙坂さんは、ためらいも無しに私にキスをしてくる。

ちゅぶ♡ちゅちや♡

乙坂さんのデ IPPキスは、私の舌を絡めとり味わうようにして離れた。

「じゃ、またあとでね」

「はい…」

そして、乙坂さんは倉庫を出て行ってしまった。彼は上階にあるメンズショップの店長で、私がバイトを初めて数カ月の頃からお付き合いをしている。私のガールズショップの店長とも最近話をするようになったみたいだけど、実は陰では私と付き合っているのだった。

すると、そこに金髪のパートさんがやって来る。

「あ、お疲れ様です」

「ニットの在庫取りに来たよ」

「あ、はい」

「じゃ、もらってくねー」

「私も整理したら戻ります」

「あいよ」

パートさんは、商品を持って行ってしまった。私が倉庫の整理を始めて少しすると、廊下の方から話し声が聞こえて来る。

「ちよつとお♡ 人が来たらどうすんのよお」

「大丈夫だって。こんなとこめったに人来ねえよ」

いやいや……ここにいるんですけど。あと、結構人来ますけど！

私は作業の手を止めて、聞き耳を立ててしまう。

「見られちゃうって」

「その方が興奮すんだろ？」

「やめてよお」

その言葉を最後に外が静かになる。

行っちゃったかな？

いや：動く気配はする。

どうしよう。作業して良いんだよね？

そう思いつつ、作業を続行しようとした時だった。

「えっ！ そんなとこ触らないでよお！」

「いいじゃないか」

「ああんっ♡」

うそでしょ？　ここ、駐車場から人が上がってくる事があるんだけど、何してんのよ。  
私は思わず扉に耳をくっつけてしまう。

「んんん…」

ちゅっちゅぷ♡

えっ？ もしかしてキスしてる？

「あ、だめ。スカートに手を入れないで」

ちよっと！

「とかなんとか言って、しっかり濡れてるみたいだぞ」

「さつきから胸触ってるからだよお」

「お前の胸、エロいからな」

「やめてって」

うそでしょお？ テナントの連絡通路でなにやってんのお！

「ちよっ！ 指入れないで」

「こんなに反応してるくせに」

「人に見られちゃうってえ」

うう、どうしよう？ 見たいけど、ドア開けたらバレるよね？

「誰も来ねえじゃん」

「触っちゃだめえ…」

「興奮してんじゃねえかよ」

もしかして…こんなところでエッチするつもり？

「だって、クリ触るからでしょお」

「ちんこ入りそうだぞ。めっちゃ濡れてる」

カチャカチャカチャ。

ベッ！ ベルト外してる！

ちよっ！ ちよっ！ ちよっ！ まてまてまて！

「なに…こんなとこで入れてんのよお…ちよっとお…」

本当にしてるし！ ここに人いるんですけどお！

「やっぱ！ 興奮すんだけど！」

「ああ！ まってよ！ こんなとこでマズいよ！ ちよっと！」

「めっちゃ気持ちよくて止まんねえ」

「だめだつて！ ああ！ まつて！ ちよ！ マズいつてえ！」

「めっちゃ興奮するんだけど！ なんかもうイキそう！」

「まつてよ！ 中出しするつもり！」

「もう無理だ」

「だめ！ 中は！」

「うっ！」

えっ！ えっ！ どうなってる？ めっちゃ気になる。

「やっべ！ こんなとこに出しちゃった」

「なにやってんのよ！」

「だって中に出すなつたじゃん！」

「そもそも出さないでよ！」

「我慢できなかったんだって」



「行こっ！ マズいつて」

そして、足音が遠ざかって行つた。

そつと扉を開けてみると、そこには人はいなかった。倉庫を出てその辺りを見てみると、床に卵の白身みたいなものがあつた。

「うそでしょ……」

精子だ…。

「どうした？」

唐突に後ろから声がかかった。

「わっ！」

「お、おう！ びっくりさせて悪かった」

後ろを見ると乙坂さんが立っていた。

「乙坂さん！」

「追加で忘れ物取りに来たんだよ。そしたら唯花がしゃがんでるからさ。具合でも悪いのか？」

「違うの。これ見て」

乙坂さんは床を見る。

「なにこれ？」

「さつき、ここでカップルがエッチしてたの」

「うわ精子かこれ！」

「そうみたい」

二人で呆然とそれを見てしまう。

「どうしたらいいんだろう？」

「じきに掃除の人が来ると思うから、放っておいていいと思うけど…」

「だれか踏まないかな」

「確かに無くはないな…んじゃ清掃に連絡しておくわ」

「はい…」

そうして乙坂さんは倉庫に向かい、私は自分の店の倉庫を整理して店に戻るのだった。

## 第二章 店長の部屋でバック責め

仕事が終わって、ガールズショップの店長からあがって良いと言われる。今日はお客さんも少なかったの、手直しもそれほど大変じゃなかった。服屋で仕事をしながらも、地下でエッチしていたカップルの事がずっと気になっていた。

ラインを見ると、乙坂さんからのメッセージが入ってる。

ー 仕事が終わったら連絡して ー

私が連絡すると、直ぐにラインが帰って来た。

ー ちよつと待ってて ー

私は二階に上がり、テナントのそばの通路に置いてあるベンチで待つ。すると乙坂さんが来る。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

「俺、今日は早番だからさ。七時上がりなんだよ、帰りに飯行かないか？」

「いいんですか！」

「もちろん」

「行きます！」

「じゃあ、七時過ぎにスタバで待ち合わせしよ」

「はい」

そこで、私は気になっていた事を聞いてみた。

「あれ、掃除されましたかね？」

「あ、昼間のあれ？」

「はい」

「確かに…掃除されたと思うけど、見にいってみるか？」

「ですね」

「ちょっと店に出るって言ってくる」

「はい」

二人は確認のため、地下通路にぶちまけられた精子を見に行く。

「まだある…」

「掃除されてないんですね」

「業者が来るのは、夜になるかもな」

「じゃあ、今日は一日このままですか」

「だな」

「やばいですよね？」

「人に迷惑をかけないようにしてほしいな？」

「ほんとです。あの、仕事中にすみませんでした」

すると乙坂さんが、私の手を引いて言った。

「ちょっとおいで」

「はい」

すると彼は私を、自分の店の倉庫に連れて来る。鍵を開けて中に引き入れて、ぱちんと鍵をかけた。

「えっ」

驚いていると、乙坂さんは私に抱きついてキスをして来た。

「ん……」

「まったく！ 俺の唯花にいやらしいものを見せやがって！」

「あ、気にしてません」

「俺が気にする」

「見てないし、聞こえたのは音だけだから」

「いやらしい行為を、唯花のそばでされたのが嫌なんだよ」

まあ：分からないでもない。乙坂さんは私を溺愛しているし、逆の立場なら私もそう思うかも。

「ごめんなさい。声をあげればよかったかも」

「いやいや。危ないよ、変に刺激しない方が良く。殴られたりなんかしたら困る」

確かに：乱暴される可能性も無きにしも非ずか…。

乙坂さんは、私をぎゅっと抱きしめて言う。

「俺の唯花に、何かあったら耐えられない」

「大丈夫、ちゃんと倉庫の中に隠れてたから」

「なにも無くて良かったよ」

「大袈裟です。大丈夫です」